The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用 ー首都圏移住者を事例としてー
Author(s)	上林, 葵
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　上　林　　葵　）	
論文題名	関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用 ―首都圏移住者を事例として―

論文内容の要旨

本研究は、出身地域の異なる親しい友人との談話における関西若年層のスタイルの在り方に着目し、その実態の把握と運用メカニズムの解明を試みるものである。この研究テーマを設定した背景には、学校教育やメディア等との関わりによって成育の過程で「知識」として保有されるようになった標準語スタイルについて、それが実際の使用場面に接した際にどのような形で実践されるのか、すなわち話者の潜在的な標準語スタイルの運用能力が如何にして発揮されるのかを明らかにしたいという問題意識がある。

多言語話者やバイリンガルなどを対象としたこれまでの研究は、複数の言語ないし変種の実際の運用能力を持つ話者を対象としたものが多く、知識としては有しているが日常生活において実践の場が少ない言語や変種に対する話者の運用能力の実現可能性を探るものについては、阿部（2006）などを除きあまり例がない。生活様式の変化や交通網の発達・整備等により人口の流出入が盛んとなった現代において、地域社会に住まう人々の潜在的な標準語能力が発揮される場面を見出すことは容易になりつつある。そうした場でどのような言語実践が行われるかを考察することは、多変種社会へと変容しつつある現代の日本社会におけることばの運用の在りようを捉えるうえで、一定の意味を持つものと考える。

本研究の考察対象である関西若年層は、標準語を使用する機会が少なく、フォーマルやカジュアルなどの場面に関わらず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」（田原2006）のなかで成育してきた一集団である。そうした社会の特質によるものもあってか、これまでの関西方言話者の言語運用に対しては、方言使用というモノリンガル的側面に注目が集まることが多かったように思われる。しかしたとえ方言が中心の社会にあっても、成育の過程で標準語を知識として習得し、理解する能力を備えていることは十分に考えられることである。このように、話者のなかで知識として潜在的に保有されてきた標準語スタイルが実際にどのように実践されるのかを捉えることは、これまでの関西方言話者の言語運用に対する見方に対し、新たな側面を提案することになるものと考える。

本論文では以上のような考えのもと、関西若年層のカジュアル談話におけるスタイル運用の在り方を明らかにすることを目指した。

本論文は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3部構成となっている。第Ⅰ部（第1章～第3章）は序論とし、本論文における研究の背景と議論の前提となる事項について述べた。まず第1章ではスタイル研究のこれまでの流れについて、海外の研究と日本国内の研究に分けたうえで整理を行った。そしてそれらを踏まえ、スタイルに関する本研究の立場を述べた。続く第2章では、本研究が対象とする関西若年層の言語運用の在り方を明らかにするための前提として、関西方言話者に特徴づけられる従来の言語使用や行動パターンについて、意識研究と実態研究の両側面から整理した。また、そうした特徴の背景にある要因として考えられてきた点についてまとめた。第3章では、前章までの研究の背景から浮かび上がる問題のありかと、それらに対して本研究が取り組むべき課題を提示する。続いて調査方法の検討を行い、調査の概要として本研究で対象とする話者等について述べた。また、本論文で使用する用語の整理や談話データの文字化方法についても合わせて示した。

本論の中心となる第Ⅱ部（第4章～第7章）では、首都圏に移住した関西若年層3名を対象に、出身地の異なる対者に対しどのような言語運用を実践するかについて、語彙・文法・音声・談話の各レベルに分けて分析・考察することを試みた。まず第4章では語彙・文法レベルとして、方言・標準語の両変種間で対応関係にある複数の語と文法項目を取り上げ、各項目について対他地域出身者場面（〔他郷〕）と対同郷出身者場面（〔同郷〕）における運用の実態を観察した。場面間の切換えの実態として、場面ごとに使用形式（方言形/標準語形）の異なる明瞭な切換えを行うタイプと、数のうえでは両場面で使用がみられるが、談話の進行に伴い徐々に当該場面の期待形式の使用へと移行していくタイプがあることを述べた。また〔他郷〕における東京語形や〔同郷〕における伝統方言形のように、各場面で使用

が期待される形式が当該場面の対者以上に顕著に用いられた点を取り上げ、移住者に特有の運用の特徴である可能性を指摘した。当該場面の「場面らしさ」を特徴づける言語形式が積極的に選択されたことは、〔他郷〕でいえば知識としての標準語スタイルが実際の運用の形として実現したことを意味する。このことから、3名は語彙・文法レベルにおいて標準語能力の顕在化に成功したといえる。

第5章では音声レベルの分析項目としてアクセントを取り上げ、方言文節量（高木2006ほか）の手法を用いて場面間の運用の在り方を捉えた。3名に共通する傾向として、形態面は場面の別を問わず方言・標準語の両変種に共通の形式が多数を占めるのに対し、アクセント面は場面によってそれぞれの変種に固有のアクセント型（京阪式アクセント/東京式アクセント）が概ね固定されていることを示した。話者によってはたとえ形態的に方言要素が含まれる文節であっても、〔他郷〕であれば東京式アクセント、〔同郷〕であればほぼ京阪式アクセントのみによる実現を固持する、きわめて明瞭な切換えを行うタイプがある。このタイプは他者や自身の過去の発話を引用ないし模倣する際にも、〔同郷〕では模倣対象の出身地の違いによって両アクセントを使い分けたのに対し、〔他郷〕では一貫して東京式アクセントを用いたことから、標準語話者に対しては方言要素を感じさせる京阪式アクセントの使用を控える「標準語話者を意識した切換え」が行われている可能性を指摘した。対する他方のタイプは上述のタイプほど徹底した切換えではないが、語彙・文法レベルと同様に談話が進むにつれ当該場面で期待されるアクセント使用へと徐々に移行するという運用を行った。引用発話に関しては模倣対象の別に関わらず一貫したアクセント使用を行っていたのが〔同郷〕であったことから、先のタイプとは反対に「方言話者を意識した切換え」を行っていると考えられる。いずれのタイプにせよ〔他郷〕での東京式アクセントの実現度の高さから考えると、アクセント面においても潜在的な標準語能力が発揮されたと結論づけられる。

第6章と第7章では談話レベルの分析項目を取り上げた。第6章では先行研究で示された関西方言話者の引用発話の使用頻度の高さ及び引用手法の独自性を受け、発話の引用方法と題したうえで、他者や自身の発話を引用する程度や具体的な引用の仕方における場面間の異同を考察した。話者によっては場面間で違いがみられたケースもあったが、その切換えの度合いは語彙や文法、アクセントなどの個別項目に比べると連続的である。また、各場面の対者との相互作用のなかで用いられたと考えられるものもあり、話者自らの判断による積極的ないし主体的な切換えとは言いがたいことを述べた。

第7章では談話の展開のさせ方に着目し、談話標識の使用を分析項目としたうえで、各場面における運用の特徴と場面間の異同を明らかにした。分析に先立ち、関西方言話者に特有の談話展開と、標準語話者に特有の談話展開の洗い出しをそれぞれ試みた。各談話に固有の特徴を切換え項目としたうえで両場面の談話展開を対照した結果、話の結末部分の示し方や談話標識の具体形式の種類に多少の違いがみられたほかは、〔他郷〕か〔同郷〕かに関わらず関西方言話者的な談話展開を維持する傾向にあり、切換えの程度が低いことが示された。このように、談話レベルの各項目は両場面を通じて関西方言的傾向が現れていることから、標準語能力を顕在化させる対象とはなりにくいと考えられる。

第Ⅲ部（第8章・第9章）は本論文の結論にあたる。第8章では、各論で提示した関西若年層3名の各場面における言語項目の切換えの実態を通して、スタイル運用のメカニズムを明らかにすることを試みた。それに先立ち、各項目についてレベル別の切換えの程度（切換え度）を算出したところ、音声、文法、語彙といった個別項目は切換え度が高い一方、談話レベルのような大きな言語単位になると非常に低くなることが示された。こうした場面間のスタイル運用の在り方を左右するメカニズムとして本論文では、社会的な場面に従って使用言語が選択される「わきまえ」が基本的な枠組みとして影響していることを、切換えに対する話者自身の意識調査の結果などを踏まえ主張した。そのうえで、そのわきまえが特に強く働くことによってスタイルが選択される「わきまえ型」と、大枠ではわきまえに従いつつもスタイルを自己のアイデンティティ表出のための言語資源として能動的に活用する「わきまえ＋資源活用型」のタイプが存在することを述べた。最後に第9章では本論文で明らかにした内容を整理し、今後の展望について述べた。

上掲のいずれのタイプであれ、これまで場面を問わず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」のなかで過ごしてきた関西若年層が、知識としてのみ有してきたであろう潜在的な標準語運用能力を、実践可能な実態としてダイナミックに発揮するさまが現れているといえる。人々の生活様式や社会生活の多様化が進む現在、知識としての変種、すなわち関西方言話者にとっての標準語にあたるものが、実際の言語実践の場で活用されうる機会は今後ますます増加していくと思われる。現代に生きるそうした人々の言語運用の在り方とそのメカニズムについて、3名という限られた人数のなかではあるものの明らかにすることができた点に、本研究の意義があるものと考える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　上林　葵　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　准教授　高木　千恵 副 査　大阪大学　教授　渋谷　勝己 副 査　大阪大学　教授　バーデルスキー　マシュー　ジェームズ

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用―首都圏移住者を事例として―

学位申請者　上林　葵

論文審査担当者
主査　大阪大学准教授　高木　千恵
副査　大阪大学教授　渋谷　勝己
副査　大阪大学教授　バーデルスキー　マシュー　ジェームズ

【論文内容の要旨】

本論文は，出身地域の異なる親しい友人との談話における関西若年層のスタイルのあり方に着目し，その実態の把握と運用メカニズムの解明を試みるものである。3 部構成で，本論文における研究の背景と議論の前提となる事項について述べた第Ⅰ部（序論），首都圏に移住した関西若年層 3 名のスタイル切換えの実態について多角的に論じた第Ⅱ部（本論），および本論で提示した関西若年層のスタイル運用のメカニズムを明らかにしようと試みた第Ⅲ部（結論）からなっている。本文 149 ページ，400 字詰め原稿用紙に換算して約 537 枚の分量である。

第Ⅰ部では，スタイル研究の潮流（第 1 章），関西方言話者の言語運用と行動パターンの概観（第 2 章），研究課題と本研究の目的（第 3 章）について述べている。ここでは，海外ならびに日本国内におけるスタイル研究のレビューを行ったうえで，本研究が対象とする関西方言話者に関する言語使用や行動パターンの特徴を整理し，関西方言話者のスタイル運用に関する研究課題をまとめた。これをふまえ，本研究の目的と意義について述べ，調査方法や調査対象の検討，調査概要が述べられている。

第Ⅱ部では，首都圏に移住した関西若年層 3 名を対象に，出身地がそれぞれに異なる話し相手に対してどのような言語運用を実践するかについて，語彙・文法・音声・談話の各レベルに分けて分析・考察している。第 4 章では語彙・文法レベルとして，方言・標準語の両変種間で対応関係にある複数の語と文法項目を取り上げ，各項目について対他地域出身者場面（〔他郷〕）と対同郷出身者場面（〔同郷〕）における運用の実態を観察した。そして，場面間の切換えの実態として，場面ごとに使用形式（方言形／標準語形）の異なる明瞭な切換えを行うタイプと，談話の進行に伴い徐々に当該場面の期待形式の使用へと移行していくタイプがあることを指摘した。第 5 章では音声レベルの分析項目としてアクセントを取り上げ，方言文節量を計量する手法を用いて場面間の運用のあり方を捉えた。結果として，場面によってそれぞれの変種に固有のアクセント型（京阪式アクセント／東京式アクセント）が使用され，場面間ではっきりと切換えられていることを示した。談話レベルの分析項目を取り上げた第 6 章と第 7 章では発話の引用方法と談話展開の方法に注目し，語形やアクセントといった小さな単位において場面間の切換えが明瞭に行われている話者であっても，談話レベルにおいてはそれがみられず，これらの項目が切換えるべきものとみなされていないと結論づけた。

本論文の結論部分にあたる第Ⅲ部の第 8 章では，各論で提示した関西若年層 3 名の各場面における言語項目の

切換えの実態を通して，スタイル運用のメカニズムを明らかにすることを試みた。切換えに対する話者自身の意識調査の結果などを踏まえ，場面間のスタイル運用には，社会的な場面に従って使用言語が選択される「わきまえ」が基本的な枠組みとして影響していることを主張した。その上で，そのわきまえが特に強く働くことによってスタイルが選択される「わきまえ型」と，大枠ではわきまえに従いつつもスタイルを自己のアイデンティティ表出のための言語資源として能動的に活用する「わきまえ＋資源活用型」のタイプが存在することを述べた。最終章である第 9 章では，関西若年層のカジュアル談話におけるスタイル運用について本論文で明らかにしたことをまとめ，従来のスタイル研究に対してどのような新しい知見を提供することができたか，どのようなことが今後の課題として残されたかについて述べ，結びとした。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は，関西出身の若年女性 3 名を対象として，移住先の友人と地元の友人という，二つの異なるカジュアル場面におけるスタイル運用の実態を明らかにしようと試みたものである。本文にも指摘があるとおり，方言と標準語の切換えを扱った従来の研究の多くが話し手の規範意識にフォーカスしたものであったのに対して，本研究では，それぞれの話者について〔他郷〕と〔同郷〕の二つのカジュアル場面の会話を収録し，各場面における実際の言語運用を捉えようとしたところに特色がある。ことばの切換えをすることが少ないと考えられてきた関西方言話者が〔他郷〕場面において言語形式だけでなくアクセントまでをも切換えているという事実を実証的に示しただけでなく，そういった切換え行動に潜むメカニズムを追究しようとした野心的な論文である。

これまでのスタイル研究が語彙や文法形式といった小さな単位の言語項目を中心に扱ってきたのに対して，本研究では，引用や談話展開といった談話レベルにも分析対象を広げてスタイル運用の全容に迫っており，新しい分野の開拓にも貢献したといえる。論文審査においては，母方言の異なる友人との会話というこれまで注目されてこなかった場面を取り上げたこと，母方言場面との比較を丁寧に行っていること，各章ごとに異なる研究アプローチをとって詳細な分析ができていることが高く評価された。文法項目の切換えについては，本論文では「ヤロ」と「だろ・でしょ」のように形式上の対応関係があるものだけを取り上げて分析を行っているが，「ヤロ」と「よね」のように用法上の重なりのある形式にまで対象を広げることで研究をさらに発展させていくことができると考えられ，今後の研究の展開が期待されるところである。

スタイル運用のメカニズムについて，本論文では「わきまえ」を基本的な枠組みとし，わきまえに沿って自身のスタイルをデザインする「わきまえ型」と，能動的にスタイルを選び取る側面をもつ「わきまえ＋資源活用型」という二つの異なる切換えタイプがあると指摘している。しかしながら，一人の話者が必ずどちらかのタイプに固定されるのではなく，本論文で「わきまえ型」とされた話者が「わきまえ＋資源活用型」のスタイル運用をする場面もあるものと思われる。また理論的には「資源活用型」というわきまえによらないスタイル運用のあり方も考えられる。スタイル運用のメカニズムの全容に迫るためにはさらなるデータの蓄積が求められるだろう。残された課題もあるが，本論文を出発点として，データを重視した帰納的な理論構築をめざし，今後のスタイル研究の発展に寄与する研究となることが期待される。以上のことから，本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。